

土木遺構が獲得する価値



岡田 昌彰
OKADA Masaaki

近畿大学工学部
社会環境工学科/准教授

いま注目される遺構、廃墟

先般、国際産業遺産保存委員会(TICCIH)から共著本の執筆オファーを頂いた。「産業遺産の再編：その保存事例」¹⁾というタイトルで、世界中から30名ほどの研究者や実務家が集まり共同執筆するというものである。二つ返事で承諾したものの、自分が日本人研究者として執筆したい内容は多岐に渡っていたので、候補をこちらからいくつか提案しエディターのDouet氏の意向を伺うことにした。選ばれたテーマは意外にも「廃墟景観」。「最も面白いチャプター候補」として採用頂いた。

この度の本誌のテーマも然り。「遺構」「廃墟」な



写真1 ハドレイ・カースル(Hadleigh Castle)

どというテーマが産業遺産や土木遺産を対象としたプロフェッショナルな業界誌にまで浸透してきていることに大きな意義を感じている。今回の特集が一つのマイルストーンとなり、新しい議論を発展させていくことを期待したい。

廃墟に魅力はあるか～イギリスの事例

「遺構」という用語は、考古学では「残存する古い建築物。また、昔の土木建築の構造や様式などを知る手掛かりとなる残存物」と定義されている。一般の国語辞典でも大方同様の定義であるが、内外において近年は遺構に対する新しい見方が現れてきているようだ。英語では“Remain(残存する、の意)”などとも訳されるが、“Ruin”つまり「廃墟」にも概念的には近い。そして廃墟の魅力は、定義にあるような考古学的価値のみならず、その即物的な存在自体にも見出されている。

これに関連して、最近大きな衝撃を受けた事例を1つ紹介したい。写真1はイギリスのエセックス州にある古城「ハドレイ・カースル」の光景である。丘の上に立つ文化遺産を訪れるピクニック客たちが写生を楽しむ視線の先には、何と崩れ果てた石造りの廃墟

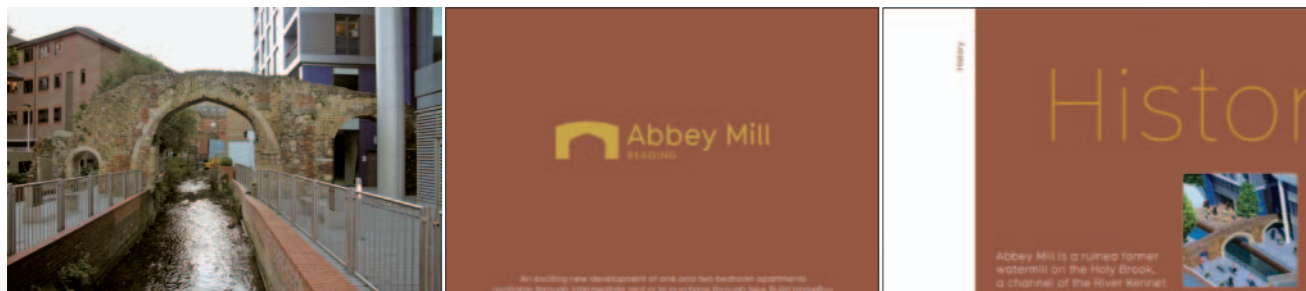


写真2 レディング修道院の水車小屋廃墟とマンション「Abbey Mill」(Reading Abbey Mill Ruins) 図1 マンション「Abbey Mill」の広告²⁾



写真3 既存廃墟Fountains Abbeyを取り囲んだ風景式庭園：スタッドレイ・ロイヤル(Studley Royal:イギリスノースヨークシャー) 写真4 フォリー(人工廃墟):ウオバーン・アビー(Woburn Abbey:イギリスベッドフォードシャー)

が佇んでいるのだ。ここは1230年代にヒューバート・デ・バー伯爵によって建造された由緒ある城であったが、後に地滑りが起き廃墟となってしまった。

彼らのこの行動は、何とも微笑ましく愉快であり、感動的であり、そしてある意味衝撃的でもあった。一見異様にも見えるこのような「廃墟礼賛」の光景には、彼の国にて幾度となく出合ったことがある。現代においても廃墟が気軽に親しまれる対象として存在し得ることを、この現象は証明している。

これ以外にも、廃墟をそのままの状態でも保存する興味深い事例がイギリスには数多く見られる。ロンドンの西約60kmに位置する都市レディング中心部に、13世紀初頭に建てられた修道院の水車小屋の廃墟が再開発地区に取り囲まれる形で現存している(写真2)。さらに興味深いのは、水車小屋の廃墟のすぐ隣に「Abbey Mill」と名付けられたマンションがあることだ。ここを経営する不動産会社の広告はさらに注目に値する(図1)。パンフレットの中では中心市街地からの近さなどとともに廃墟の歴史がアピールポイントの一つとして紹介されているのだ。歴史的建造物との近接性が不動産のブランドをも高めているのである³⁾。

このような廃墟に対する積極的な姿勢にはイギリス特有の感性がはたらいっているとも言える。詳細はいくつかの拙稿⁴⁾⁶⁾を参照頂ければと思うが、それは18世紀の風景式庭園の台頭にて開花している。貴族らは既存の廃墟を庭で囲み、理想的な風景を作り上げた(写真3)。あるいはそれだけでは満足せず、風景の実現のために人工的な廃墟(フォリー:Folly)までも新たに構築したのである(写真4)。

「大いなる円環」— “廃墟の魅力”の大衆化

18世紀のイギリスでは、廃墟の美しさを巧みに取

り入れた庭が貴族らによって各地に造成されていき、それがさらに廃墟に対する審美眼を一般市民にまで浸透させた。日本において廃墟論を先導している美学者・谷川渥は、この点についてたいへん興味深い考察をしている。風景画に描かれた廃墟に感銘を受けた人々は、それに似た風景を探し求め旅に出る。旅先で本物の廃墟に出くわし、ふたたび感銘を受ける。あるいは同様に感化された造園家がこのような人工廃墟を庭園内に築造する。そこを訪れた人々はふたたび感銘を受け、さらに同様の風景を求めて旅に出る…。このような「大いなる円環」⁷⁾が、浪漫的な廃墟の美学を一般社会にまで広めていったというのだ。このことは、廃墟を嗜む感性が貴族階級のみならず一般市民にも伝播し、市民による新しい人工廃墟が造成されたことにも通ずるだろう⁵⁾。ここに「重層的な価値の輪廻」が生まれたのである。

この「円環(輪廻)」は、現代の廃墟に対する価値観の広がりにも当てはまる。いまや各書店では、「廃墟」に関する夥しい数の本が1つの棚を占有している。SNSやブログが溢れるネット上では、旅人たちはプロガーなる「表現主体」を兼ねている。彼らは感動させられる客体であると同時に、感動を発信し第三者を感動させる主体でもあるのだ。価値の「円環(輪廻)」は、ネットとデジカメの大衆化で爆発的に広がったと言えるだろう。今から20年ほど前には“廃墟ブーム”などという言葉があったが、もはや一過的な“ブーム”と呼ぶべきタイムスパンを超えている。廃墟の価値の広がりはいずれイギリスのような定着を見るかも知れない。そして、このような廃墟に対する関心が、時の経過とともに廃墟の如き外観を呈することとなった土木・産業遺産に対する関心の高まりにもつながっていることは容易に想像でき



写真5 奔別炭鉱立坑槽の廃墟

が深まることも遺産の重要な役割の1つであるが、そのストーリーに耳を傾けるキッカケをつくるのはやはり特徴的な姿そのものである。ここから受ける“物的な感動”によって、我々は産業遺産の世界にいざなわれる。ストーリーには実体に対する理解を深化させる力があるが、産業遺産の“廃墟的外観”には人々を対象へといざなう力がある。

る。実際、廃墟をテーマとした近年の写真集に写し出されている被写体にも、土木・産業遺産の類が多く含まれている。

廃墟的外観と、廃墟の構築

現役で使用されているか否かに関わらず、土木・産業遺産は産業考古学、技術史や地域史などの観点から様々な価値をもっている。我々は、対象が内包するこの種の「ストーリー」を受信する一方、遺産が固有の特性としてもつ、長い年月にわたり存在することによって風雨にさらされ風化した姿にもまた、魅力を感じる。例えば、写真5は北海道三笠市にある**奔別炭鉱立坑槽**の廃墟であるが、この姿をご覧になった皆さんは、直感的に「美しい」、あるいは「魅力的な廃墟である」と感じられるだろう。この産業遺産に言及しているWEBページでは「廃墟の殿堂」などとも表現されている。この“即物的な感動”は、ストーリーに関する知識がたとえゼロであったとしても成立する。

無論、「1960年の竣工時は東洋一の高さ」「国内初のスキップ・ケージ巻揚げ方式の採用」「爆発による死傷者事故」というストーリーを知ることによってこの遺産あるいは北海道幾春別という立地に対する理解



写真6 レッドウッド・ストーン社による現代版フォリー。イギリスハンプトンコート宮殿フラワーショーにおける展示(2010年)

フォリーと高麗茶碗との意外な共通点

このような廃墟の即物的な魅力を研究していた矢先、「外観」のみを廃墟に似せた工作物、すなわち「現代版フォリー」を作り続けている興味深い会社がイギリスにあることを知った。英国王立園芸協会(RHS)の主催するハンプトンコート宮殿フラワーショーでは毎夏世界中から著名な造園家やアーティストが腕を競い作品を展示するが、その中で特に異彩を放っていた作品があった(写真6)。このレッドウッド・ストーン(Redwood Stone)社は石庭の装飾品を35年間にわたって手がけているが、1991年の切尔西・フラワーショーにてゴシックフォリーなる“年月を経たように見える建築物”を出展以来、その製作を続けている⁸⁾。18世紀に全盛期を迎えたフォリーに対する“需要”が1990年代に入ってふたたび復活したことは現象としても興味深い。

このように、人工廃墟の構築とともに既存の廃墟を芸術品として「見立てる」審美眼は、実は日本が伝統的に持ち続けてきたものに他ならない。「わび・さび」ということばは今や人口に膾炙し尽くした感もあるが、先人が成し遂げた成果を改めて見直してみると、そこには廃墟先進国イギリスに勝るとも劣らぬ先鋭的な審美眼が潜んでいることがわかる。

わび・さびはそれぞれ「簡素の中に見いだされる清澄・閑寂な趣」「古びて味わいのあること。枯れた渋い趣」などと定義されているが、この美学が顕著に表現された例の1つとして、茶の湯の「高麗茶碗」を挙げることができる。15～17世紀の日本人は何とも前衛的な美意識を確立していた。

写真7の2つの茶碗はいずれも高級品だ。古めかしく味わいがあり、簡素閑寂、渋い趣がある。まさにわび・さびの情趣をそのまま生け捕ったような名器と呼べるものである。ただ、両者には実は決定的な違いがある。それは、製作時における「美の意図」の有無だ。

左側の「見立ての茶碗」は、実は朝鮮半島にあった「日用雑器」なのである。すなわち、これは元々わび・さびの美的意図の下に製作されたものではなく、古びた雑器を目利きが見極め、芸術品として「見立てた」ものである。時の経過とともに平凡な日用雑器が獲得した風韻を観察者が鋭い“選球眼”で事後的に発見し、美学として確立したものだ。

これに対し、右側は「注文茶碗」と呼ばれる。これは日本の茶人らが「渋い茶碗」を最初から窯元に“注文”し、新たに焼いてもらった作品である。作品を「まるで長い時を経たように」見せてしまう窯元の技巧には目を見張るものがある。すなわちこれは元々、人工的に作られた“古めかしい外観”なのである。

この哲学は、廃墟の見立てと構築にも明確に当てはまる。見立てられた現実の廃墟と、新たに構築された廃墟とは表裏一体であり、わび・さびの美学においては対等の価値をもちあわせているのだ。実際、高麗茶碗の中には見立てか注文かの判定が困難なものも存在しているが、いずれにしても各々がわび・さびの美学の結晶体であることに変わりはない。

新たな地平～土木遺構のもつ、意味を超えた価値

このように、廃墟にはその意味を超えた即物的な価値があることがわかるが、この点に着目すると、土木・産業遺産における新しく興味深いテーマが浮かび上がってくる。まず1点目は、古めかしい外観に価値が見出せるのであれば、いかにそれを維持、あるいは創造、またはreplicateすなわち“複製”ができるのか、というテーマ。そしてもう1つは、元々「意味」の欠如してしまった遺構をどのように価値づけられるのか、という設題である。

例えば、壮大な鉄道整備構想のもとに着工するも途中で計画自体が頓挫した鉄道未成線の遺構などは好例である。竣工を見なかった土木遺構に対し地域経済への貢献などといった評価は困難であるが、地域の景観を特徴づけているものや、高架橋や高架下などの鉄道空間が新たに地域の道や特徴的な有蓋空間を形成しているものもある。奈良県五條市から奥吉野地域を縦断し和歌山県新宮市まで計画されていた木材運搬鉄道の未成線「五新線」の遺構などは好例である。現在高架橋アーチ部の一部は倉庫や神社参道の入口、あるいは居酒屋などと

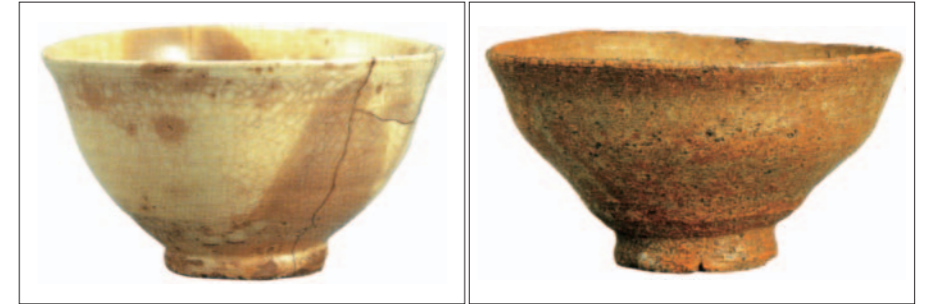


写真7 高麗茶碗：見立ての茶碗(雨漏茶碗：左)と注文茶碗(柿の蒂茶碗：右)⁹⁾



写真8 鉄道未成線の五新線新町高架橋

して利用されているほか、軌道の遺構は特徴的なバス専用道や市中心部への近道として利用されている。高架橋上から俯瞰する伝統的建造物群保存地区の街並みも壮観だ。これを単なる事業の頓挫を表す「負の遺産」と捉えるのみならず、地域資産として積極的に価値づけるような発想の転換が可能ではないだろうか。

地域貢献という当初の意味が欠落した土木遺構を、どのように見立て、価値づけるか。特徴的な土木遺構を積極的に活用すれば、そこには再び新たなストーリーが生まれてくるであろう。その潜在力を存分に引き出す方法を、これからも考究していきたい。

<参考文献>

- 1) James Douet, Eusebi CASANELLES、Masaaki OKADA、Hsiao-Wei LIN etc (2012) Industrial Heritage Re-tooled: The TICCIH guide to Industrial Heritage Conservation、TICCIH (2012年11月)
- 2) イギリス不動産会社 Southern Housing Group 公式HP: <http://www.southernhousinggroup.co.uk/> (2012年11月現在)
- 3) 岡田昌彰(2012) 欧米における産業遺産の活用、日南市文化財調査報告第5集 尾銅山跡調査報告書4、日南市教育委員会
- 4) 岡田昌彰(2009) フォーラム 産業遺産と廃墟景観、土木学会土木史フォーラム No.37
- 5) 岡田昌彰(2012) フォリーのススメ～OSOTOが発見する廃墟の美学、OSOTO WEB、(財)大阪府公園協会
- 6) 岡田昌彰(2001) 産業廃墟景観論・試論、ランドスケープ研究 Vol.64 No.5
- 7) 谷川渥(2003) 廃墟の美学、集英社
- 8) Redwood Stone Official Website: <http://www.redwoodstone.co.uk/> (2012年11月現在)
- 9) 矢部良明(2002) すぐわかる茶の湯の美術、東京美術
- 10) 小原敏文・岡田昌彰(2012) 土木遺産としての鉄道未成線・五條市新町高架橋に関する研究、土木学会関西支部平成24年度年次学術講演会講演概要集